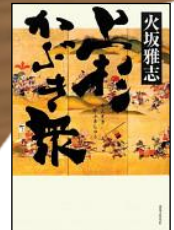


赤、青、黄、黒……。世の中には色々な「色」があります。今回は、印象的な色が出てくる本をご紹介します。



『**剣と紅**』
高殿円 著
文藝春秋
Fタ
篠崎ほか所蔵

遠州井伊谷の領主の娘で、不思議な力を持ち小法師と呼ばれていた香。彼女は化粧を嫌う男勝りの性格で、政敵に結婚を迫られるや、「紅(口紅)はいらぬ、剣を持って」と告げ、出家してしまうほど。井伊家が家臣の讒言や戦により、香の父を始め一族のものを次々と失う悲劇に見舞われた時、香は直虎という男名を名乗り領主となる……。戦国時代にお家のために戦ったのは男だけでない。これは、女たちの戦いを描いた歴史物語です。ちなみに、作中で香は一度だけ、紅を引くのですが、それがいつかは読んでからの楽しみということ。



『**大ふへん者**』
(「上杉かぶき衆」所収)
火坂雅志 著
実業之日本社
F七
篠崎ほか所蔵

天下一の傾奇者・前田慶次郎。世間のイメージでは若くて派手なイメージですが、本書では六十歳過ぎの白髪の慶次郎が登場！ 周囲に隠れて白髪を染めたり、娘に翻弄されたりと違う視点で描かれていて新鮮です。

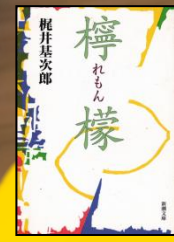


『**ミッドナイト・バス**』
伊吹有喜 著
文藝春秋
Fイ
篠崎ほか所蔵

離婚したある家族と、その周りの人々の再生と再出発の話、というにはかなり重い話だ。一人ひとりが強かったり、問題を抱え込んでしまったり……。家族だからこそ打ち明けられない事情や将来への不安を抱え、それでも前を向いて行こうとする主人公たちが愛おしい。茜色に染まっていく空の下を走ってゆく夜行バス、そして勇気を持って一步を踏み出してゆく主人公達の幸せを願わずにはいられない。過去は決して元には戻らないけれど、未来を変えることはできるのだから。

そのメロディに魅せられて!

『**カラフル・クリーム**』
クリーム G1ク05304 篠崎ほか所蔵
カラフルと言えば『カラフル・クリーム』です。もともと仲が悪いのに無理やり結成して、「よく2年半も続いたな」というスーパー・バンドです(笑)。ブルースを基調にしたスタンスは、この後のブリティッシュ・ロックの方向を定めたアルバムといっても過言ではないです。三つ巴のインプロヴィゼーションにこそ醍醐味があるので、このアルバムで物足りない人は、次作の傑作『クリームの素晴らしき世界』(篠崎所蔵)もオススメです。



『**檸檬**』
(「檸檬」所収)
梶井基次郎 著
新潮文庫
BF力
篠崎ほか所蔵

色が印象的な小説で真っ先に思い浮かぶものがこの作品。主人公が街を徘徊していると一軒の果物屋に辿り着き、そこで売っていた檸檬に強く惹かれ購入します。その檸檬の色や形の表現豊かな様はこの作品の最大の特徴で、檸檬の存在感を絶大なものとしています。“レモンエロウの絵具をチューブから搾り出して固めたようなあの単純な色”の檸檬を使って、主人公の自己感覚の変化を巧妙に描いた話になっています。



『**黒いピエロ**』
ロジェ・グルニエ 著
みすず書房
953ク
篠崎ほか所蔵

サン＝マルタン祭りの縁日は、11月いっぱいまで続く。その祭りの中で、福引きの景品の前にいる、黒いサテンの衣装を着た「黒いピエロ」は大変な人気で、主人公の“私”は飽くことなく、そのピエロを眺め続けたものだった。しかし、いつしか黒いピエロを見なくなり、私も戦争やナチ侵攻という大きな時代の波に飲み込まれていく。この小説では、黒いピエロがどういった意味を持つのか説明されていない。ちょっと、この小説を読んで、黒いピエロの意味を考えてみませんか？



『**口紅のとき**』
角田光代 著
求龍堂
F力
篠崎ほか所蔵

鏡台の前で鮮やかな口紅をぬる母の姿に、複雑な気持ちになる6歳の私。死んだ祖母にいつもの口紅がぬられたとき、初めて死を理解した12歳の私。6歳から79歳まで、一人の女性の人生を口紅のエピソードで綴った短編集。



『**青いドレス**』
(「風の組曲」所収)
阿刀田高 著
潮出版社
Fア
篠崎ほか所蔵

人が死ぬ時は、あの世から合図が来るという。主人公は、叔母の見舞いに行った病室で、毎日あの合図が来ていると、叔母から聞かされた。彼女にきた合図は青いドレス。それは過去の因縁によるものだという……。背筋がヒヤッとする作品です。



『**窓辺の灯**』
(「カポーティ短篇集」所収)
トルーマン・カポーティ 著
ちくま文庫
B933カ
篠崎ほか所蔵

とある事情で深夜の森の中を歩いていた主人公は、小さな家を見つけ、そこで一晩お世話になることに。家にはお婆さんが独りであり、膝の上にはオレンジ色の猫がいた。お婆さんと猫……。ああ、人は恐ろしいと同時に哀しい生き物なのだ。



『**黄色い目の魚**』
佐藤多佳子 著
新潮社
JFサ
篠崎ほか所蔵

黄色い目の魚は主人公のみのりが小学生のときに描いた魚の絵です。叔父はその絵を気に入り自分の家に飾りましたが、みのりはその“いやあな目つきの魚”が嫌いでした。若さゆえの不安定な心情が巧く描かれた青春小説です。



『**茶色の朝**』
フランク・パヴロフ 物語
ヴィンセント・ギャロ 絵
藤本 一勇 訳
高橋哲哉 メッセージ
大月書店
953ハ
篠崎ほか所蔵

国によって猫、犬、新聞、本、服など全てが茶色にされてしまうという形で描いた「反ファシズム」寓話。フランスにおいて茶色は「極右」の人たちを連想させるとのこと。今の日本でも、人ごととは思えないのでは……。

